日中母語場面と接触場面におけるあいづちのタイミングとその差異

古川智樹

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

tomokifurukawa@hotmail.com

1. はじめに

日本語学習者が日本語母語話者（以下 JJ）と会話をするとき、あいづちのタイミングが異なるために会話がうまく進まないという問題が起きることがある。円滑な会話進行にあいづちは欠かせないものであるが、適切なタイミングで打たなければ、あいづちとして機能しない。そこで、適切なあいづちのタイミングとは何か、また実際に JJ 母語場面、接触場面、他言語母語場面ではどのようにあいづちが違い、なぜ違うのかを解明することを目的とし、あまり取り上げられていない非言語行動も含めて分析を行った。

2. あいづちのタイミングに関する先行研究と研究課題

・日本語を対象とした先行研究

水谷(1984, 1988)、メイナード(1993)、今石(1994)、小宮(1986)、黒崎(1987)、杉藤(1987)など。

⇒音声的な弱まり、イントネーションの変化、ポーズ、間投詞、うなずきなどが話し手側にあった時。

・日本語と他言語との対照研究

劉(1987)、楊(1999)、メイナード(1993)、Miller(1987)、Clancy et al.(1996)など。

⇒中国語は日本語よりもあいづちを打つタイミングが少なく、文末で打つことが多い。

英語も文末付近であいづちが多く、日本語と比べると文中で打たれることは少ない。

・JJ と他言語を母語とする日本語学習者との接触場面研究

楊(1997)、White(1989)など。

⇒中国人日本語学習者（以下 JC）は JJ と比べて「て形」「格助詞」の後のあいづちが少ない。

接触場面では、JJ のあいづちは変わらないが、アメリカ人のあいづちは母語場面より多くなる。

・先行研究の問題点

・品詞におけるタイミングの分析は発話内容、相手によって左右されるため不適切。

・非言語行動はあまり取り上げられていない。(メイナード 1993; 楊 1997 のみ)

・数の違いについての研究が多く、なぜ違うかまで踏み込んだ分析はあまりされていない。

・研究課題

・品詞以外にあいづちのタイミングとして適切な指標となるものはあるか。

・JJ 同士の会話、JJ と JC の接触場面会話、中国語母語話者(以下 CC)同士の会話ではどのような違いが見られるか。違いがある場合はどのようなことが原因となっているか。

3.　調査概要

3.1.　分析対象と撮影方法及び話題

分析対象：JJ 母語場面、JJ と JC の接触場面、CC 母語場面、各 10 組の会話、時間数 300 分

撮影　　：3 つのビデオカメラ、IC レコーダーを使い、各組 30 分程度撮影、録音。

話題　　：初対面、自由会話

3.2.　あいづちの定義

聞き手が話し手の話を継続させるために、話し手の発話権を取ろうとしないで発する新しい情報提供を伴わない短い表現（非言語行動を含む）で、話し手に聞き手の発話に対する応答を求めないもの

3.3.　分析手順

データ収集後、調査資料のあいづちを認定、不明な点はフォローアップインタビュー（以下 FUI）を行った。分析は Tannen (1992)の「異文化間の誤解を分析するためのモデル」の手順に従って行った。

4.　結果と考察

4.1.　JJ、JC、CC のあいづちのタイミング

表 1 は話し手のポーズ、頭の縦ふり、その 2 つが共起したところで、聞き手がどの程度あいづちによって反応したか、その平均値をパーセンテージで表したものである。

【　表 1　話し手のポーズ・頭の縦ふりと聞き手のあいづちによる呼応率　】

	文中呼応率			文末呼応率			全体呼応率		
	ポーズ	ポ＋頭	頭	ポーズ	ポ＋頭	頭	文中	文末	合計
JJ	52%	84%	61%	78%	93%	50%	61%	86%	69%
JC	26%	61%	8%	51%	82%	0%	35%	67%	43%
CC	13%	40%	0%	50%	59%	0%	13%	50%	30%

表 1 を見ると、「ポーズ＋頭の縦ふり」があるところでは、JJ、JC、CC ともにかなり高い確率で聞き手はあいづちを打って反応している。

＜会話例 1　Base-JJ－JJ-A＞

B-JJ：1 年生僕は 1 年生前期すごいがんばったので　　後期でちょっとね<A 笑い>んで勉強しなく

JJ-A：　　（はい）

b　aa　　ba　　ba a a

B-JJ：てもいけるじゃんって感じになってくのね　そこでガタンと落ちてーんでーんでー2 年生僕が

JJ-A：　　（あー）

b　a　　ba a　　a　　b b

B-JJ：2 年生になったときに 1 年生の授業ばっかりいつも取ったわけ< 2 人笑い>

JJ-A：　　（あそうなんですか）

a　　ba　ab

4.2.　JJ、JC、CC のあいづちのタイミングの違い

【　表 2　話し手 cues[1] と聞き手のあいづちの割合　】

	話し手cues合計		聞き手あいづち数				聞き手呼応率		あいづち総数		あいづちの割合		文数	割合(cues/文数)	
	文中	文末	文中		文末		文中	文末	文中	文末	文中	文末		文中	文末
			cues 有	cues 無	cues 有	cues 無									
JJ	52.8	25	32.4	6.7	21.4	0.2	61%	86%	39.1	21.6	64%	36%	28.5	1.85	0.88
JC	60.5	22.1	21.1	2.3	14.8	0	35%	67%	23.4	14.8	61%	39%	26.6	2.27	0.83
CC	41.2	33.5	5.5	3.3	16.6	3.1	13%	50%	8.8	19.7	31%	69%	49.1	0.84	0.68

・文中と文末のあいづちの割合は JJ、JC が 6：4 であり、CC は 3：7 で反対の結果。

・呼応率、あいづち総数ともに JJ＞JC＞CC の順になる。

・話し手 cues は文中では JC＞JJ＞CC の順に多く、文末では JJ≒JC＞CC の順に多い。

● **なぜ CC のあいづちは文末に打たれる傾向があるのか。**

⇒話し手の cues の問題。1 文当たりの cues の数が少ない上に、JJ と比べると、特に文中において、あいづちのタイミングを話し手が作り出していないことが原因として考えられる。

＜会話例 2　Base-CC－CC-A＞

B-CC：我们一次…这学期才改的．我们原来上学期的时候，每个人只许借 4 本．然后这学期改成一个人

CC-A：

a

B-CC：可以借 6 本，研究生可以借 10 本，就是直接可以借 10 本．主要因为我们学校那个比较小嘛．

CC-A：

a

B-CC：从，从那个教学楼到图书馆 5 分钟，从寝室到图书馆 10 分钟．再还书，借书都很方便．

CC-A：

● **ベース JJ の話し手 cues が多いにもかかわらず、JC のあいづちはなぜ少ないのか。**

⇒①母語の影響の可能性→文途中にはあまり打たない。

＜会話例 3　Base-JJ－JC-C＞

B-JJ：例えば日本で　　英語を 勉強する為に大学に行っても授業は全部日本語　でちょこっとまあ外国の

JC-C：　　（はい）

b　　b　　bc　　b　　b　　b

[1]今石(1994)では、話し手の発話の中にあいづちの挿入が可能であることを聞き手に示すシグナルを「あいづち挿入可能シグナル／あいづち要求シグナル」と呼び、言語形式とイントネーションを挙げているが、本研究では、話し手の頭の縦振り、ポーズ及びそれに伴う上昇イントネーションを聞き手のあいづちを促すものとして「話し手 cues」と呼ぶこととする。

B-JJ：先生 ネイティブの英語のネイティブの先生が来てこうやって英語で使うくらい

JC-C：　　あその英語を教える先生は

b　　b　　b　　b

B-JJ：　　日本語もできる ちょこっと でもまあそのネイティブの先生は英語だけど 他の

JC-C：日本語ができますか↑

c　b　c　bb　　b　b

B-JJ：日本人の先生は英語は使わない たいてい日本語でやる　　うん

JC-C：　　（そうですかー）　中国と全然違います

b (B 手横振り)　c　b

⇒②話し手の発話を理解するのに時間がかかりあいづちが遅れる。→日本語能力の問題

＜会話例 5　Base-JJ－JC-D＞

B-JJ：もう中国はこの前お正月だったじゃないですかー (1)えっと旧正月ですよね中国(3)

JC-D：　　（うーん）

b　b

B-JJ：えっと 1 月の↑終わりぐらい(1)でしたっけ↑　終わりぐらいに　お正月だっ

JC-D：　　1 月の　20　20　21 日

d dbb

B-JJ：そのとき　は中国には帰　られなかったんですよね↑　　(そうですか)

JC-D：　　帰らなかったんです

b　　dd　b

5. まとめと今後の課題

本研究のまとめとして以下の 3 点、今後の課題として以下の 2 点が挙げられる。

・話し手の cues があいづちを打つ契機となっている。

・JJ のあいづちの呼応には、母語の影響と日本語能力の問題、両方の可能性が考えられる。

・CC のあいづちの少なさは、話し手 cues が少なく、そのタイミングがないことが考えられる。

・母語の影響の可能性は、中国語以外の言語を母語とする日本語学習者のデータが必要。

・学習者がどのように発話を理解してあいづちを打っているのか、その processing の分析も必要。

＜主要参考文献＞

Clancy,P.M, Thompson,S.A, Suzuki,R. & Tao,H. 1996. The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin, *Journal of Pragmatics* 26, 355-387.

今石幸子(1994)「話し手の発話とあいづちの関係について」『大阪大学日本学報』第 13 号 107-121

楊　晶(1997)「中国人学習者の日本語の相づち使用に見られる母語からの影響－形態、頻度、タイミングを中心に」『言語文化と日本語教育　平田悦朗先生退官記念号』第 13 号　117-128